# Mt. San Gorgonio登頂記

２０１４年8月２０日（水）から２２日（金）

小川弘子

# Mt. San Gorgonio登頂記

２０１４年8月２０日（水）から２２日（金）にかけて、細渕巌隊長、齋藤泰隊員、赤津経男隊員と小川弘子の４名で、南カリフォルニアの最高峰、Mt. San Gorgonio（標高１１５０３フィート）に登ってきました。

お若い頃から山登りの経験豊富な細渕隊長、齋藤さん、子供の頃から裏山に登って山菜や薪を拾っていたという赤津さん、それに比べてビギナーにちょっと毛が生えた程度の私と、４名の登山経験は色々ですが、歩くことが大好きなメンバーが、数か月前から準備を重ねて、その日に備えました。細渕隊長は、今回は時間的に余裕をもったプランを立てて下さり、テントサイトでゆっくりとお昼寝をしたり、自然を楽しんだりしようということで、それも含めて楽しみにしてきました。

一日目。前夜の山は雷雨。雨の中を歩いたことのない私は、ちょっと心配しながら、赤津さんに乗せてもらって、午前５時に齋藤さん宅に集合し、そこから４名揃って齋藤号でBig Bear
Lakeの南側にある登山口へ。途中から降り出した雨と思っていた以上の低温に、不安は増すばかりです。４名とも雨具を着て、午前７時１５分に、いざ出発。細淵隊長と齋藤さんが、

「雷が激しくなったら、撤退しましょう。」と話しながらも、齋藤さんは、「槍ヶ岳に行ったときは、全行程、雨でした。」と涼しい顔をしておられるので、さらに不安が募ります。

雨は降ったりやんだりでしたが、雷はやがて鳴りやみ、齋藤さん、私、赤津さん、細渕さんの順に並んで、歩を進めました。途中、暑くなって雨具を脱いだかと思うと、直後に降りだし、あわててまた着たりして、思ったようには距離がかせげません。途中ですれ違った女性２人のパーティーから、前夜の雷雨がいかに激しかったかを聞き、お天気が回復状況にあることに、ほっと胸をなでおろしました。ひたすら続く登りに息を切らせながらも、途中の景色をめでたり、珍しい鳥を眺めたり、赤津さんは気づかない間に写真を撮ってくれたりの、山登りならではの楽しみもありました。歩き始めて間もなく、我々を追い抜かしていった若い男性３名のグループは、トレイルが雨でひどいダメージを受けていて、危険だから登頂を断念したと言って、途中で引き返してきました。あの人たちにとって危険な道を我々が歩き通せるのか? 疑問ではありましたが、行ってみて決めようということにしました。

途中のランチ休憩や小休止も含めて、歩き始めて７時間１５分後の午後２時３０分に、これから２泊するHigh Creek Campに到着。男性３名は各自で、私は齋藤さんに手伝ってもらい、テントを設営。疲労と高度のせいか、すべての行動は、ノロノロとしか進みません。山での食事は、おにぎりとインスタントのスープだけでも、おいしいものです。食後は、翌日の登頂に向けて、早目にテン

トに入り休みました。ただ、気温はぐんぐんと下がり、冷え性の私だけでなく、男性３名も寒さでほとんど寝られなかったようです。

二日目。午前７時起床。ベーグルとチーズの朝食後、午前９時に頂上を目指して出発しました。歩き出してすぐ、あまりの道の悪さに、驚くことと言ったら！何せ、山登りではなく、岩登りなのです。前日の３人グループが言っていたトレイルのダメージのすごさを実感しながらも、先頭を行く齋藤さんは、足跡のついている所を慎重に確認しながら、ゆっくりと登っていきます。男性より足が短く歩幅の狭い私では、一歩で登り切れないほどの岩もあり、後ろから赤津さんが持ち上げて、前から齋藤さんが手を引っ張ってくれて、何とかよじ登る、という場面も二度や三度ではありません。上から登ってきた道を見ては、「これって、帰りは降りるのよねぇ。」と笑ってしまうほどでした。

途中から、足跡も見えなくなり、いよいよどちらの方向に進むか判断に困り、細渕隊長が一方に、齋藤さんがもう一方に先回りして確認しようとしても、わずかな地図とコンパスからは、どちらとも判断できず、帰路にかかる時間、時々降る雨、岩を下りる危険性を考え、残念ながら今回は登頂を断念しようという結論に達しました。その場で手持ちの昼食をとり、下り始めたのが午前１１時３０分。一歩、一歩、滑らないように、ケガをしないように、確認しながらの下りは、スリル満点です。どうしても危ないと思われるところは、お尻を付いて滑り降りるということも、何度もしました。格好なんて、気にしている場合ではありません。とにかく、無事にテントまで戻らなくてはと、それだけに集中していました。
後で気が付くと、足には何か所も打撲のアザができていました。

午後早目にキャンプ地に戻り、日本茶などを飲んでくつろいでいたところ、一人で登頂を果たし下山するところだというアルメニア人ハイカーに会いました。いかにして、あの厳しい道を行ったのかと聞いたところ、「えっ？君たち、どの道を歩いたの？こっちの岩の道？それ、間違いだよ。君たちのテントのすぐ後ろのこの細い道、ここから行くんだよ。君たち、完全に間違ったんだよ。」って・・・・・・。そんなぁぁぁぁ。あんなに大変な思いをしたのに、あれって、違う道っていうか、道じゃなかったんだぁ。その人は、ゆっくり歩いてテントから３時間半で頂上へ、下りは２時間だったというじゃありませんか。「明日、早起きしたら、君たちも行けるんじゃない？」という言葉を聞いたのが先か、「じゃぁ、朝３時に起きて４時に出発したら、お昼前にテントに戻って、夕方までに駐車場に戻れるよぉ。それは行かなくちゃ！」と私が声を上げたのが先か、よく覚えていませんが、どうせ寒くてよく眠れないのなら、早起きして行こうという提案は、半分ゴリ押しのような感じで可決となりました。後で調べたところ、この日歩いたのは、High
Creekという渓谷で、本来歩くべき道ではなかったのです。

午後５時に夕食の予定でしたが、その少し前から降り出した雨が止まず、４５分ほども待ったでしょうか。大急ぎでカレーライスとお味噌汁を食べ（おいしかったぁ）、早々にテントに戻りました。各自、翌日の登頂の準備と、その後のテント撤収のための荷物の整理をし、早々に休みました。やっぱり寒くて、よく寝られませんでした。

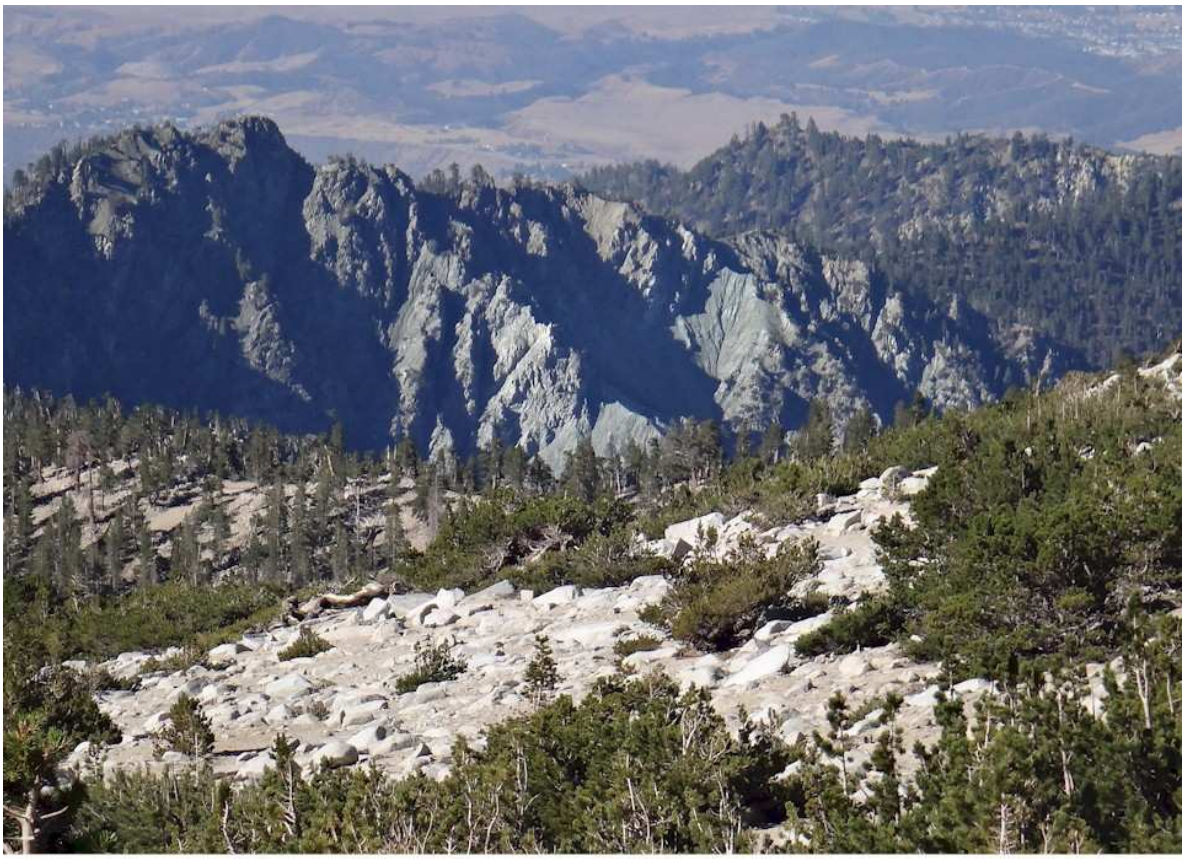
三日目。午前３時起床。テントの中でゴソゴソと準備をしていると、齋藤さんと赤津さんが「寒いから、やっぱり止めとく？」と話しているのが聞こえます。私としては、雨が降っているなら、低体温症が恐ろしいので断念かと思っていましたが、空には満天の星。細渕隊長の、「決行します。」の一言で、真っ暗な中、ヘッドランプの明かりを頼りに、午前４時に今度こそ頂上に向けて出発しました。

真っ暗な中に木々の間から見える、月の明るいこと。齋藤船長からの星座について説明に納得したり、少しずつ明るくなる空に声をあげたり、この時間ならではの楽しみもあるのです。

歩き始めてぴったり４時間後の午前８時に、Mt.San Gorgonioの山頂に４名揃って到着。昨日、一昨日の雷雨が嘘のように、我々が山頂にいる３０分の間は、真っ青な空が広がり、周りの景色もはっきりと見え、ひそかに「やっぱり私は晴れ女！」と一人でほくそ笑んでいました。記帳し、写真を撮り、エネルギー補給をしてから、下山開始。道が二股に分かれるポイントでは、齋藤さんが地面に書いてくれていた矢印を頼りに歩き、午前１１時にテントサイトに戻りました。すぐにお赤飯の昼食をとり、テントの撤収を開始。ここでも私は男性の手を借りなければならず、おまけに、そのテントは重いからと言って、登りと同様、細渕隊長が持って下さったので、本当に申し訳ないやら、有難いやらです。

午後１時３０分に下山を開始。５．６マイルの下りだから、目標は５時間だったのですが、降り始めてすぐ、細渕隊長に滑ったり転んだりという異変が見られるようになりました。実は、昼食の時に、お赤飯を半分以上残してしまったのを見ていたので、少し心配はしていたのです。やはり、途中でエネルギー補給のために休憩を取り、それ以外にも頻繁に小休止をとりました。齋藤さん、赤津さんが、荷物を分けて持ったり、それまでずっと先頭だった齋藤さんが細渕隊長の様子を見るために最後尾につき、私が先頭となり非常にゆっくりとしたペースで歩きました。細渕隊長は、以前からよくない右膝をかばうようにしていた結果、左膝も痛めてしまい、足が殆ど動かなくなったそうです。

とにかく、暗くなるまでに車に戻るのを目標として、一歩ずつ足を動かしました。非常に滑りやすく足場の悪い道がほとんどで、お互いに声を掛け合いながらの道行きで、駐車場に戻った時には、午後７時を過ぎており、あと３０分遅ければ真っ暗になっていたという時間でした。とにもかくにも、大きなけががなく、４名無事で降りて来られたことが、何よりうれしいことでした。



そんな疲労困憊の中、齋藤さんは運転というお役目が待っており、あとの３名は、乗せていただくありがたさをかみしめながらの帰途でした。最初の予定から５時間半遅れの午後９時３０分に、齋藤さん宅に到着。本当にお疲れ様でした。

昨年のMt. Whitneyに引き続き、今回も、最初の予定とは随分ちがった内容の山登りになりました。何と言っても、２日目に登頂のはずが、道を完全に間違えて、High Creekをよじ登り、３日目早朝に登頂。でも、それを失敗と思わず、“一粒で二度おいしい”グリコのキャラメルのような登山だったと喜ぶ我々は、どこまでも歩くのが好きな人たちだと、自己満足しています。

最後に、皆さん、特に女性の皆さんが知りたがる、アノことについて。そうです、お手洗いです。基本的に、キャンプ地と言っても、山登りの途中に少し平地があるから、テントを張ることができるというだけで、お手洗いはありません。どこかに囲いがあるわけでもありません。ではどうするか？草むらや岩かげをさがす、この一言に尽きます。当然、テントの近くはダメですし、かと言って、トレイルから見えるところもイヤですよね。何せ、花も恥じらう乙女ですから。その結果、場所探しのために、かなり歩き回らなければなりません。それと、健康状態に関わることですから、仲間との間で男女の差なく、お手洗いの話題は避けられません。これから登山に挑戦しようかと思っている貴女、もっと詳しく聞きたければ、個人的にお話ししましょう。今回はこれ以上の詳細は、省略することにします。

山登りも人生も、計画通りには行きません。それも含めて楽しむ気持ちが大切なもの同じ。経験豊かな先輩から、一つずつ学び取る大切さも同じ。そう考えると、山登りは人生の縮図のような気がします。さぁ、次回は、いつ、どこへ行くのか。今から楽しみです。今回の山登りを実行するにあたって、協力をして下さった皆様に、心よりお礼申し上げます。

２０１４年9月1日
小川弘子